

## 第四回

### 二葉亭四迷訳『あひゞき』（番外編）

皆さん、こんにちは。前回、二葉亭四迷の『あひゞき』訳の話をしました。じつは二葉亭はこの小説を二度訳しています。新旧二つの訳を比較すると、面白いことも見えてきます。今回は番外編ということで、二葉亭訳を取り上げてみましょう。

#### ロシア文学と近代日本

明治時代にロシア文学を読んだ人々と現代の私たちとでもっとも違う点は何かと言えば、それは「同時代性」でしょう。たとえばドストエフスキーは1881年、ツルゲーネフは1883年に亡くなっています。つまり明治14年と16年です。チェーホフは日露戦争が起きた1904年（明治37）、トルストイに至っては1910年（明治43）年まで長生きしました。

二葉亭も『あひゞき』初訳の序で「このあひゞきは先年佛蘭西で死去した、露国では有名な小説家、ツルゲーネフという人の端物の作です<sup>10</sup>」という紹介を書いています。明治日本の読者たちはツルゲーネフやドストエフスキーの小説を同時代文学と受け止めていたのです。何といっても、ここが私たち現代の読者と決定的に違う点でしょう。実際、私たちは何のために近代文学を読むの

---

<sup>10</sup> 『二葉亭四迷全集』第二巻、筑摩書房、1985年、5頁。

かという問いは考えてみる価値があり、この授業の出発点ともなっています。ただそれに対する私の考えをお示しするのはもう少し先にしましょう。

さて、明治時代の読者にとってロシア文学は特別な意味を持っていました。ロシア文学が近代後発国の文学だったからです。この点、英文学やフランス文学とは事情が違います。これまでもお話してきたように、後発国の文学には先発国の文学にはない（あるいは目立たない）特徴があります。ここでは二点挙げましょう：

(1) 近代化への期待と懷疑 自由や平等の理念、近代科学の成果、高度な産業、文化的洗練、軍事的強さ——先発国が誇る「近代化の恩恵」に対して、後発国の知識人たちは憧れと称賛だけでなく、疑いと反発も感じました。先発国へのジェラシー、コンプレックス、逆にそれらをひっくり返して生まれるプライド、アイデンティティなどが後発国の文学の大きなテーマになります。これに合わせて「彼ら（先発国）はわれわれ（後発国）を意識しないが、われわれは彼らを意識せずにいられない」という後発国共通の自意識も描かれるようになります。

(2) 貧しい民衆（農民）の描写 近代化の恩恵を受けられず貧しさと無知の中で暮らしつつも、純朴さと人間性を失わない「民衆」を描くことは、後発国文学の最大の課題でした。「民衆」の形象には近代化の歪みが凝縮して表れる反面、民族の源流と秘められた可能性も描き出されたからです。「どんなに努力してもわれわれ（後発国）は彼ら（先発国）と同じようにはなれないし、なるべきでもない。われわれにはわれわれの道があるはずで、それを教えてくれるのが民衆だ」——これが後発国文学の目指した救済のストーリーでした。

この二つの主題を中心に、明治日本とアジア諸国の知識人たちはロシア文学を読みました。自国の社会をどう描くべきか、借り物でない真の国民文学をどう創るかという問いへの同時代的見本として読んだのです。

## 二葉亭の小説

二葉亭四迷（本名長谷川辰之助、1864-1909）は「くたばってしまえ」という自嘲から二葉亭四迷というペンネームを考えたとか、「文学は男子一生の仕事にあらず」という言葉を残して文壇を去ったとか、伝説的逸話の多い人です。私の敬愛する安井亮平さん（早稲田大学名誉教授、2020年没）によれば、二葉亭は「日本でロシアに係わる人が、文学、思想、歴史、経済、政治その他専門分野に関係なく、等しく直面する問題の原型を示す存在である<sup>11</sup>」とのこと。生涯、ロシアと二葉亭に向かい合った碩学の言葉として重みがあります。二葉亭はどのような作品を残したのでしょうか。

文学に限れば、もっとも重要なのは小説『浮雲』（1887-1889）とロシア文学の翻訳、とりわけツルゲーネフの『あひゞき』でしょう。一度は捨てた文学に戻って発表した小説『平凡』や文芸評論、座談にも面白いものはたくさんありますが、『浮雲』と『あひゞき』の重要度には及ばないでしょう。極言すれば、この二編によって二葉亭の名は日本文学史上不朽のものとなったのです。

『浮雲』は作者がまだ二十代前半で書いた長編小説です。未完に終わりましたが、あらすじは以下の通りです。

〔あらすじ〕官吏の内海文三は叔父夫婦の家に下宿しているが、その娘のお勢と惹かれ合っている。ところが文三は役所の人員整理で職を失ってしまう。そこに割り込んできたのが、出世街道を突き進む同僚の本田昇である。抜け目ない叔母のお政は、一人娘の婿候補を文三から昇に見かえる。お勢本人も、理想ばかり語る気弱な文三をしだいに疎んじるようになる。昇の軽薄さと計算高さを知る文三は、お勢の身を案じ煩悶する。とにかく彼女ともう一度話をしてみよう、と思うところで作品は未完に終わる。

作品は全三編からなっていますが、進むにつれて文体と内容が急激に変わっていきます。文体はより分析的に、内容はより深刻になります。若い二葉亭が

---

<sup>11</sup> 安井亮平「日露戦争前後の二葉亭四迷とロシア」『日本近代文学大系4 二葉亭四迷集』角川書店、1971年、101頁。

書きながら進化していくようすが手に取るようにわかります。卓越したロシア語力で読み込んだロシア文学から吸収したものを自分なりの工夫と実験を加えて使っています。簡単などころでは登場人物の名前があります。「内海文三」という名はいかにも内向的で、書物に親しむ性格を表しています。逆に「本田昇」は上昇志向の強いキャラクターにピッタリです。叔母の「お政」は利に敏く、「政治的」に行動する人柄を表しています。そしてヒロインの「お勢」は、時の勢いに翻弄され、どちらに進んでいるか自分でも分かっていない女性像をイメージさせます。お勢の不安定さこそ近代化する日本社会の象徴です。

ヒロインが民族の将来を象徴するのは近代文学の一つのフォーマットで、ロシア文学でも好んで用いられました。今日でもロシアでしばしば上演されるアレクサンドル・グリボエドフの『知恵の悲しみ』(1833)という戯曲があります。長い西欧旅行から帰ってきたチャーツキーという若い貴族が、モスクワ貴族界の旧弊ぶりと俗悪さに呆れ、怒り狂うさまを描いた喜劇ですが、全編の鍵を握るのがヒロインのソフィアです。彼女はチャーツキーと相思相愛だったのに、彼の外遊中、父親の秘書である現実的・実利的なモルチャーリンに心変わりしてしまっています。西欧帰りのチャーツキーが語る理想は彼女にはチンプンカンプンで、彼がモスクワ貴族界を批判するのも意地悪にしか聞こえません。チャーツキーは周囲の無理解、とりわけ愛するソフィアの無理解と裏切りに絶望し、ふたたび外国に旅立ちます。ちなみに、ソフィアという名は「知恵」を意味し、いかにもアイロニカルです。

並べてみると『浮雲』と『知恵の悲しみ』は構図が似ています。定見のないヒロインを中心に、旧世代と新世代の対立、さらに新世代の中でも理想派と現実派の闘いがくり広げられます。そのあいだで迷うヒロインは、先が見通せない自国の近代化を象徴しているのです。

東京外国語学校でロシア語を学び、その後もロシア文学の翻訳と紹介に励んだ二葉亭は、近代後発国において文学はたんなる娯楽ではありえないことを理解していました。言いかえれば、「近代後発国の文学者」としての自覚をいち早く持っていたのです。二葉亭の生涯が示す「日本でロシアに係わる人が(……)等しく直面する問題の原型」とは詰まるところ、近代後発国の知識人としての自覚に関わるものでないかと思います。二葉亭は文学、政治、ジャーナリズムと「居場所」を転々としながら、この自覚を行動に移そうとした人でし

た。

## 二葉亭訳『あひゞき』から

始めに述べたように、『あひゞき』の二葉亭訳は二つあり、初訳は明治21（1888）年、改訳は明治29（1896）年に発表されました。どちらの訳文も、現代の私たちからすれば、古い日本語の印象を与えます。

しかし何度かお話したように、二葉亭の訳文は発表当時、とても新しい日本語として受け止められました。小説家の田山花袋は青年時代、『あひゞき』を読んだときの驚きを回想しています。

粗大な経書や漢文や国文に養われた私の頭脳や私の修養は、この細かい不思議な叙述の仕方をした文章に由って一方ならず動かされた。これが文章かとも思って惑った。しかしそういう細かい叙述法は、外国の文章の特長で、日本の文章は、これから是非そう行かなければならないと思った私は、それから注意して、雑誌や新聞を見るようになった<sup>12</sup>。

若き花袋にもっとも印象を与えたのが「細かい叙述法」だったことが分かります。前回紹介した林の描写などが代表例です。

さて、『あひゞき』の初訳と改訳を読み比べると、多くの人が初訳の方に、読みにくいながらも独特な魅力を感じるようです。改訳の方は読みやすくなっており、現代日本語にかなり近づいているのですが、初訳の新鮮さが色褪せた印象を与えます。初訳と改訳のあいだで二葉亭のロシア語力や文学的経験は増していたはずですから、不思議なことではあります。

二葉亭の翻訳については多くの研究がありますが、現時点でもっとも信頼すべきものとして柗内裕子の『日本近代文学と『獵人日記』』（水声社、2006年）があります。第三章「二葉亭とツルゲーネフ」では『あひゞき』の二種類の訳文を詳しく比較検討しています。私が今回お話することは、多くの点で柗内さん

---

<sup>12</sup> 田山花袋『東京の三十年』岩波文庫、1981年、34頁。

の論に拠っていることをお断りしておきます。

大学の授業で『あひゞき』を読ませると、学生が興味を持つのはアクリーナとヴィクトルの会話の部分です。たとえば、待ち合わせの時間をはるかにすぎてヴィクトルが登場する場面を、初訳、改訳、現代訳（佐々木彰による）で読み比べてみましょう。

〔初訳〕「待ったか」ト初めて口をきいた、尚ほ何處をか眺めた儘で、欠伸をしながら、足を揺かしながら「ウー？

少女は急に返答をしえなかった。

「どんなに待ったでせう」ト遂にかすかにいった。

「フム」ト云って、先の男は帽子を脱した。さも勿體らしく殆ど眉際よりはへだした濃い縮れ髪を撫で、鷹揚に四顧して、さてまたソッと帽子をかぶって、大切な頭をかくして仕舞た。「あぶなく忘れる所よ。それに此の雨だもの！」トまた欠伸。「用は多し、さうゝは仕切れるもんぢやない、その癖動ともすれば小言だ。トキニ出立は明日になった……」<sup>13</sup>

〔改訳〕「待ったか？」と矢張何處か他處を眺めながら、足を揺かして欠び雑に云ふ。

少女は急に返答を爲得なかつた。

「どんなに待ったでせう」と漸う聞えるか聞えぬ程の小聲で云ふ。

「ふむ！」と男は帽子を脱つて、殆ど眉間から生えだした濃い髪髪の毛の思切つて渦を卷かした奴を勿體らしく撫で、大様に四方を顧眄して、さて又密と帽子を冠つて、大切な頭を蔽して了つた、「危なく忘れる所よ。それにこの雨だもの！」と復た欠び、「用は多し、さうゝは仕盡れるもんぢやねえ。その癖動ともすれば小言だ。時にお立は明日だよ……」<sup>14</sup>

〔現代訳〕「どうだい、」と相変わずそっぽを向いたままで、片足をぶらぶらさせ

<sup>13</sup> 『二葉亭四迷全集』第二巻、9頁。

<sup>14</sup> 同上、178頁。

て、あくびしながら口をきった。「大分待ったかい？」

娘はすぐには返事ができなかった。

「ええ、大分待ってよ、ヴィクトル・アレクサンドルイチ。」と彼女は、し  
まいに、やっと聞き取れるくらいの声で言った。

「あ、そうかい！（彼は帽子をぬぎ、ほとんど眉のすぐわきから生えてい  
る、濃い、ぎゅっと縮らせた髪の毛をもったいらしくなでつけて、大様に  
あたりを見まわしたのち、用心深く自分の大事な頭にまたかぶせた。）すっ  
かり忘れてしまうところだった。おまけに、ほら、この雨だろ！（彼はま  
たあくびをした。）仕事は山ほどある。そう何から何まで行きとどきやしな  
い。それなのに小言をくらうんだからな。ときに、おれたちは明日発つよ  
……」<sup>15</sup>

二葉亭訳では、ロシア語原文や現代訳に比べて、アクリーナの可憐さ（「ど  
んなに待ったでせう<sup>16</sup>」）とヴィクトルの横柄さ（「ウー？」「フム」<sup>17</sup>）が強調さ  
れており、私たちの注意もそこに行きがちです。ところが、この会話の場面は  
じつは当時としても定型的で、江戸末期に流行した人情本での男女のやりとり  
を二葉亭は参考にしています。

花袋の回想にもあったように、当時、驚きをもって迎えられたのは会話の部  
分ではなく、自然描写とその叙情性でした。花袋は次の一節を暗唱したことを  
記しています——「鳩が幾羽ともなく群をなして勢い込んで穀倉の方から飛ん  
できたが、フト柱を建てたように舞ひ昇って、さてパッと一斉に野面に散った  
——ア、秋だ！」。最後の「ア、秋だ！」は明治の文学青年たちの胸に残った名  
調子でした。ロシア語原文では「秋の気配だ！（признак осени!）」と体言止め  
になっており、二葉亭は言い切りの力をうまく伝えています。一方、改訳では  
「秋に違ひない！」となっており、より説明的な分、表現のパンチが落ちてい  
ます。

<sup>15</sup> ツルゲーネフ『獵人日記』下巻、佐々木彰訳、岩波文庫、1958年、106頁。

<sup>16</sup> ロシア語原文ではたんに「ずっと前からです、ヴィクトル・アレクサンドロヴィチ」。

<sup>17</sup> 「ウー？」という間投語はロシア語原文にはなく、「フム」は“A!”。

さて、初内さんは「二葉亭はなぜ二十五編ある『獵人日記』の中から「あひゞき」を選んだのであろうか<sup>18</sup>」という問いを立てています。これは私たちにとても重要な問題です。「民衆を描く」という近代文学の課題については前回お話ししましたが、初内さんは別の観点を示しているので、それを紹介して終りにしましょう。

初内さんはまず、連作短編集『獵人日記』中、『あひゞき』がかならずしも重要度の高い作品でないことを指摘しています。たしかに『獵人日記』にはもっと有名な作品が何編もあり、二葉亭は当然それらも読んでいたでしょう。たとえば『シチグロフ郡のハムレット』は、近代ロシア文学における「余計者」の形象をいちやく描いた作品として有名です。「余計者」というのは、才能や意欲に恵まれているにも関わらず、活躍の場を得られない人物像のことです。ロシア社会の近代化の歪みを描く上で欠かせない主題でした。その重要性は二葉亭も分かっていたはずで、『浮雲』の内海文三の造形にも役立てられています。

その上でなお二葉亭が『あひゞき』を選んだ理由として、初内さんは三点挙げてます。(1) 欧文のリズムを参考に言文一致を進めようとしたこと、(2) 人情本とは違うあいびきのあり方を知ったこと、(3) 悲恋ものに対する関心、です<sup>19</sup>。その上で、この短編が農奴の恋愛、つまり民衆の生活を描いたものであることは二葉亭にとってそれほど重要でなかったのではないかと彼女は述べています。

二葉亭は「農奴同士の恋愛」を描いているという「あひゞき」の価値には気付いていないのではないかと。二葉亭が惹かれたのは、日本の読者が予期する人情本的あいびきのように展開しないその不思議さであったように思われる。人情本的表現と、新しい言葉とが入れ替わり立ち替わり用いられる会話の訳出に、その不思議さがかもし出されている。<sup>20</sup>

---

<sup>18</sup> 初内裕子『日本近代文学と『獵人日記』』、253頁。

<sup>19</sup> 同上、254-255頁。

<sup>20</sup> 同上、254頁。



たしかに、二葉亭の第二長編『其面影』は悲恋もので、その種の作品を多く書いたツルゲーネフに気質的に近いものがあったようです。実際、二葉亭訳にはツルゲーネフ訳ですぐれたものが多く、“I love you”を「死んでもいいわ」と訳したという話は有名です（ただし実際にはロシア語原文は“Бама”「(私は)あなたのものよ」)。「文学は男子一生の仕事にあらず」と言いつつも、悲恋ものが好きだったのでしょうか。人間の思想(考え)と気質(好み)が一致しないことは二葉亭に限らず、よくあることです。

舩内さんの研究に深い敬意を表した上で申し上げますと、二葉亭が民衆の主題の重要性に気づかなかったという説は受け入れにくいように思います。二葉亭はロシア文学だけでなく政治評論もよく読んでいましたし、当時日本にいたロシアの革命家たちとの交際もありました。民衆という主題がロシア文学にとって持つ意義は十分理解していたはずです。若き二葉亭が『あいびき』を選んだ動機のうちには、たとえ無意識的にではあれ、民衆の主題の発見があっただろうと思われまます。

## 読書ガイド

田山花袋『東京の三十年』岩波文庫、1981年

二葉亭四迷『二葉亭四迷全集』第二巻、筑摩書房、1984年。

舩内裕子『日本近代文学と『猿人日記』——二葉亭と嵯峨の屋おむろにおける『猿人日記』翻訳の意義を通して』水声社、2006年

ヨコタ村上孝之『二葉亭四迷——くたばってしまえ』ミネルヴァ書房、2014年。